

小諸で開いた俳句祭

小諸市で1〜3日に開いた「こもろ・日盛(ひさかき)俳句祭」の期間中、慶応大の学生が俳句祭の様子を載せた瓦版を発行した。受け付けの手伝いなど運営にかかわりながら、学生の視点でイベントや街の魅力について伝えるフィールドワークだ。祭りの参加者は毎号楽しみに読んだり、学生と交流を深めたりした。

同大の加藤文俊准教授(コミュニケーション論)の研究室に所属する学生13人が2チームに分かれ、それぞれ5回発行した。多くはモノクロのA4判で、吟行に同行取材して俳句祭の魅力をリポートしたり、学生自身が滞在中の一

慶応大生が魅力取材

瓦版発行祭り参加者に好評

場面を俳句にしたりした。3日に最終号を受け取った新潟

市の主婦、田村紅子さん(68)は「あったことがすぐに読めてうれし



3日の俳句祭参加者に、当日発行した瓦版を手渡す学生(中央)

い。俳句も若々しくて率直」と笑顔。中には、取材する様子を詠んだ俳句を贈られた学生もいた。4年生の青山貴行さん(23)は「イベントを振り返ってもらうきっかけになればいい」と話した。

加藤准教授の研究室では毎年数回、「広告などのメディアを通して地元の魅力を伝える」ことをテーマに、全国各地でフィールドワークを実施。今回は招待参加の俳人と加藤准教授が知り合いだったことから計画した。

大学に戻った後も、撮影した街角などの写真を使い一人一人がポストカードを制作。活動拠点として使った「北国街道与良館」などで市民や観光客らに配布する予定だ。